

「ラ・セーヌ」

古いフランス映画に「舞踏会の手帖」という名作があった。第二次世界大戦以前、1937年に制作された作品なので、もちろんモノクロである。日本でも翌年に封切られた。戦後も上映され、昭和30年代、学生時代に観て、大いに感激した記憶がある。当時はフランス映画全盛で今なお話題となっている「望郷」や、「霧の波止場」「パリ祭」「天井桟敷の人々」などなど、次々に浮かんでくる。「舞踏会の手帖」もそのような作品の一つである。

監督は、ジュリアン・デュヴィヴィエ。マリーベル主演。当時の女性の、服装の優雅さ、品のいい美しさは現代には求め得べくもないものだ。簡単にあらすじを要約すれば、夫を亡くした主人公は遺品を整理していたとき、若かったころに記した自分の一冊の手帳を見つけ出した。それは初めて舞踏会に出席した16歳の時、踊ってくれ、愛を囁いてくれた7人の男たちの名前を書き記した手帳であった。そのときから16年の歳月が過ぎていたが、彼らは今、どうしているのだろうか、懐かしい思い出がよみがえり、手帳を頼りに、訪ね歩くことを思いつく。

再会した彼らとの束の間の交流がオムニバス形式で語られる。16年という、短いとは言いが

たい歳月は当然彼らの環境を変え、心も変えてしまったりしていた。なかには彼女の結婚を知って絶望し、絶ちがたい未練を引きずって自殺をした男がいたことを知った。しかし、再び彼らに会うことはそんなにロマンチックなものではないことを痛切に知る旅でもあった。弁護士になっている男、医者として活躍しているもの、あるいは山のガイドになっているもの。闇の世界の人物になって顔をきかせているボス。7人目に訪ねた理髪師の男は再会を喜び、昔と同じホールに出かけて踊ってくれたのだが、彼女は店の雰囲気、あまりの貧弱さに失望感に打ちひしがれた。しかし彼女の隣の席に座っている16歳ぐらいの少女はいう。「ビロードのカーテン、純白のドレス、何もかもすてき！」それはまさに16年前の彼女自身の姿であった。

歳月の流れは残酷である。いまさら、16年前に踊った男たちに会ったとて無意味なことであった。いや彼らは、突然現れた昔の、一夜だけ出会った女が訪ねてきても迷惑なだけだったかもしれない。それでも映画のラストでは、亡くなった初恋の相手の子供を預かって育てることで救いをみいだしている。

一つ一つのエピソードは丁寧で、当時を象徴するようなモノクロの風景が、良き時代をみせてくれて、私にとって好きな映画の10本の指にはいる作品ではある。

日暮れが少しずつ伸びていく春の、霞がかかった蒼い空を眺めながら、半世紀も前に過ぎ去ってしまったわが青春時代を想う。晩年になると、走馬灯のように来し方の人生を一瞬にして目の当たりに見るといふが、そのなかで人との絡み合いは茫洋として記憶をかき混ぜてみても、思い出を拒否する自分がいる。しかしある特定の「場所」、脈絡もなく切り離された一断面の風景が鮮明に浮かんでくるのだ。煌々とした光に反映されたその「場所」に、瞬間に私を連れ去っていくのだ。「場所」を探して私はさまよっていく。

いつの間にか私はその風景の一つとなる。

* * *

新宿駅東口から一塊となった人の群れは塵埃のように街中に吐き出される。無数といっていいほどの遊塵、そのなかの一粒の私は、折からの風にふらふらと舞い上る。肩がふれそうなあの人、この人、私をとりまく無縁のひとたちの群れ。冬ばれの青い空の下、日差しが高く上がるにつけいよいよ数を増していく。

目的の「場所」は昭和30年代、新宿歌舞伎町にあった「ラ・セーヌ」というジャズ喫茶店。現在は跡形もなくなっていることだろう。コマ劇場も5、6年前に閉館した。50年以上経って老朽化が原因らしい。あの当時、「ラ・セーヌ」という大型音楽喫茶店はコマ劇場のすぐそばの雑

居ビルにあった。コマ劇場跡を目標にすればわかるに違いないと思って久しぶりに新宿歌舞伎町にでかけた。左に折れ、靖国通りを横切つてさらに奥に道を入った先が歌舞伎町である。実はコマ劇場のあった場所は駅前のロータリーを西武線に沿つてすぐに入ったほうが近かったのだが、なにしろ何十年ぶりのことで土地勘が狂い、回り道をしてしまった。いい加減な方向感覚で歩いて居たのだが、いつの間にか、繁華街と雑踏は消え去つて、ひっそりした歩道の両側に豪華なラブホテルが林立している。歓楽街のすぐそばに、こんな淫靡な区画があつたのかと驚くような静かさである。たまに通り過ぎる男女二人ずつ、うさん臭そうにホテルの周りをうろつく警備員風の男、とても老女が一人歩きするような場所ではない。50年近い歳月の記憶はまばらで目印のコマ劇場がどこにあつたかも定かでないで、うろろしながら方々を歩き回つた。

「大久保公園」と入口に書かれた広場があつた。JR「新大久保」駅の近くのようだ。公園らしい木立はないがこの地区にしてはかなり大きなグラウンドがあり、子供たちが野球をやっている。中に入つてみる。塀の近くにしつらえたベンチに、髪を茶色にそめて黒のレースのストールをまとつた女性が一人で腰かけていた。

「ここはコマ劇場の跡地ですか」と声をかけてみた。青いアイシャドウにピンクの口紅をつけ、膝に組んでいる指には真っ赤なマニキュアが塗つてあつたが、頬に深く刻まれているおびただし

い皺はかなりの高齢であることを表していた。女性は物憂げにふりかえったが、低い声でこたえてくれた。「コマ劇場のあった場所はもう一つ先の通りで、とつくに壊して今、高層の商業ビルが建築中よ」。

私はずいぶん遠回りをしてしまったようだ。「ラ・セーヌ」は新宿駅から近い場所にあったのだ。「誰かを探しているの」と怪訝そうな様子で聞いてくる。

「いえ、「ラ・セーヌ」というジャズ喫茶が昔この辺にあったのだけれど、なつかしくなって」「ラ・セーヌ？」ちよつと首をかしげたが、「よかったら休んでいかない？」彼女は心持腰をずらせて私がゆっくり座れる場所を作ってくれた。「ありがとう」ちよつと疲れて一休みしたくなっていくときであった。私は彼女の好意にあまえて隣に腰をおろした。

雲一つない空であった。柔らかな日差しが心地よい。女性は退屈していたのか、私が地図にうといと気がついたのか、ぼそぼそとかたり始めた。「以前はこのあたりは角筈とよばれていて映画館などの娯楽施設もたくさんあり、とてもいい街だったの。コマ劇場のあった場所には歌舞伎座が建つはずだったのが、予算がないとかいう関係で頓挫してしまい、結局コマ劇場が建つたというわけ。それでこの辺の地名は歌舞伎町になったのよ。いまは風俗店が多くなって怖い街というイメージがあつてさびしいわ」

歌舞伎町で長い間暮らしてどんな人生を歩んできたのだろう。ごく普通の家庭の主婦の雰囲気ではない。皺の一つ一つが物語っている過去の歩みに興味がわいたがそんなことを詮索する立場ではない。

まさにコマ劇場は解体され、その場所に高層ビルがあらかた出来上がっていた。まだ、ロープが張られていて未完成であったが、一階に「東宝シネマ」を内蔵した堂々たる商業施設で上の階はホテルのようであった。未練たらしく、昔の面影を見出すべくもないその周辺をうろろする。

「ラ・セーヌ」はその間近の、雑居ビルの3階にあったはずだった。半世紀も経った今、ビル自体があるとは思えない。しかし、場所だけでも特定したかった。現在も新宿はジャズの街である。歌舞伎町靖国通りには作家村上春樹が経営するジャズ喫茶「ダグ」があるし、「ナルシス」という有名な店もあるはずだ。たいていレコードを聴かせる店だが、「ラ・セーヌ」はライブハウスだったのだ。名の知れたバンドが日替わりで演奏していた。もうビルの名前も忘れてしまった。そんなあやふやな記憶で訪ねてきても場所を特定することはそもそも無理だったのだ。呆然と立って居る四つ角の、ななめ向かいの、古びて間口のせまいビルの一階のドアに「アシベ貸ホール」と書かれた看板がある。「あしべ」は当時、「マヒナスターズ」が常連バンドで出演していた。

30年代のままのホールであろうか、しばし立ち止まって中を覗き込むが、薄暗くて狭いホー

ルは埃にまみれ、階段だけが上に伸びていて人影はまったくない。うら寂しい思いでまた道をへだてたところから眺める。「ラ・セーヌ」のあったビルの跡は結局わからなかった。

一度も入ったことのない「まんが喫茶」とか「キャバクラ」「カラオケ館」、「無料案内」で客を引き込む「風俗店」、「ホストクラブ」など、すべて私には無縁の店ばかりが並んでいる。しばらく街中をウロウロしていたが、大通りに面して「ルノワール」というなじみ深い名前の喫茶店が見つかり、ほっと一息ついた。のどが渴いて、さっそく休むことにする。煉瓦造りの階段は暗くて、途中の踊り場で引き返そうかとおもったが、もう二度と来ることはないだろう歌舞伎町である。ぜひ入ってみようと思いついた。せまい階段をのぼっていくと、蔦の葉を彫刻したどっしりとした木製のドアがあった。

室内は明るく、どこにでもあるチェーン店、「ルノアール」の雰囲気であった。窓際の席に通され、コーヒーとはちみつのたっぷりかかったフレンチトーストを注文した。窓から、大通りを行き交う若い人たちを眺める。歌舞伎町の喫茶店に腰かけている自分が現実味のないものに思えてデジャヴの感覚に陥った。

昭和30年代の初め、私は銀座のデパートで働くOLであった。各売り場でセールスを経験し、

その後、本社の事務と営業の仕事についていた。フランク永井の「有楽町で会いましょう」や「西銀座駅前」「夜霧の第二国道」などの歌謡曲が全盛で、西銀座駅前の交番の前には「ここに数奇屋橋ありき」という碑がたっていた。高度成長の活気に満ちた時代、銀座に恋はあふれていた。

また、銀座には、クラシックやシャンソンのレコードを聞かせる「田園」とか「白馬車」「琥珀」「らんぶる」など、豪華で大型の純喫茶が数多くあった。新宿、池袋、渋谷など、歓楽街にも同様の店があつて、コーヒー一杯で長い時間、静かにレコードを堪能することができた。歌声喫茶「ともしび」や「どん底」なども若者に人気があつた。仕事のかえり、幾度か足を運んだのが新宿歌舞伎町のジャズ喫茶「ラ・セーヌ」であつた。

「ラ・セーヌ」には舞台があり、それを囲むようにかなりの数の客席があつて劇場型音楽喫茶であつた。コーヒーもライブであるだけにかなり高かつたように思う。当時、人気のあつたバンドが交代で出演していたが、私のお目当てはタンゴ演奏、「早川晋平とオルケスタ・ティピカ東京」であつた。早川晋平のバンドネオンに合わせて藤沢蘭子がタンゴを歌う。前座を務めていたのが当時まだ無名だった菅原洋一だったが、彼のアルトの音程はタンゴの雰囲気によく合い、透명한声量で私を魅了した。あの有名な「ラ・クンパルシータ」や、「ジーラ・ジーラ」、「アディオス・パンパニーラ」「ミロンガ」など、アルゼンチンタンゴのクラシックな名曲をうたつて場内を魅了

した。早川晋平は、妻藤沢蘭子とともに楽団を率いて本場アルゼンチンに何度か渡航し、本場でも高く評価された。当時のペロン大統領の前で歌い、全土にラジオ放送され、アルゼンチンでも人気を博したという。蘭子の、すらりとして美しい容姿はいまでもはつきり目に浮かぶ。

しかし、私は一体、誰と一緒に行ったのだろうか。連れの顔が思い出せない。おそらくそれぞれ違っていて、その場限りの人たちだったのであろう。タンゴが聞きたくて、一緒にいく相手は誰でもよかったということだ。

タンゴはアルゼンチンの港町、ヴェノスアイレスで生れたといわれている。街の女たちは遠洋航路から立ち寄る船員たちを、港で待っていて、彼らに会った喜びを踊りに表現したのがアルゼンチンタンゴ発生だといわれている。長い間会えなかった恋人に会う感動、そして見知らぬ男たちを待ち受ける街の女たち、そんな情熱のなかからタンゴの音楽と踊りは生まれたといわれている。

私は思い描くことができる。やがては海の彼方に帰っていく男たちとの束の間の愛。その喜びと悲しみをタンゴの曲にのせて踊る。彼らの、彼女たちのほとばしるような想いはそのまま踊りの表現に生かされる。春の昼下がり、私もその中の一人になって、彼らと同化する。劇場喫茶はいまやヴェノスアイレスと化す。

——「踊ってください」と近づいていく。「私の凍り付いた心を、体を溶かすように、どうかわたしと踊ってください」とすり寄っていく。やがてリズムに乗って浮遊する。街角にあふれるカップルの群れは、大きなうねりとなって飛翔していく……。

(2015年 3月

